

# キリスト教倫理における直説法と命令法II

名 木 田 薫

岡山理科大学教養部

(平成3年9月30日 受理)

## (一)

古代においても現代においても妥当することだが、この世界の中でのあらゆる出来事はそれ自体のために生じているのではなくて、全て神の栄光に役立ち、そしてそのことこそが神による創造の本来の目的である。このような神の栄光に関連して、人について言えばその罪を消すこと自体が問題というよりも、むしろ神の前にあって人に罪過が帰されぬことが大切である。特に洗礼においてこういうことが問題とされる。洗礼はやはり不可欠なのであろうか。たとえ受洗してもその後の生き方がキリスト者として余りにも不適切であれば亡びの対象になるとも考えられるのである(1 Kor 5 : 12 f)。心の中での決断を外へ表わすという意味では大切であろう。特に迫害もありうる古代においては。洗礼はキリストのからだ一般への組入れであって特定の教会への加入ではないが、その結果として清くなること、罪をはなれることを意味している<sup>1)</sup>。水は清めのシンボルである。そこで組入れ、清めの二つの意味がある。かくて直説法と命令法との問題も生じてくる。更に 1 Kor 12 : 13, Gal 3 : 27f, Eph 4 : 45 等が示すように、洗礼によって霊における交わりが生まれ、この交わりは神の民、聖なる民やあらゆる異教の諸民族を相対化して、人と人との間のあらゆる対立、分裂を克服するのである<sup>2)</sup>。洗礼をうけて神の民となることによって民族相互の対立も消えるのである。

さて、このような組入れによってキリスト者個人としてはパウロも言う如く「着ようと願う」(2 Kor 5 : 4) ようになる。イエス・キリストは聖霊によって本来は彼自身のものを、また所有しているところのものを我々キリスト者に着せるのである<sup>3)</sup>。本来から言えば主にのみ属することが多くの者にいかにして関わるかについては、このようにキリストが我々に自己のものを着せることによってである。たしかにその通りと言えよう。しかし真に着ることが成就するためには我々自身が自分の着ているものをまず脱いでなくてはならない。つまり我々自身が実存的に変化することが不可欠であろう。というよりもむしろ着ることと同時に変化すると言ふべきであろう。こういう事態が生ずるためには人の自我の否定が必要である。こういう状況にあってこそ、キリスト者はキリストを通して愛された者として、許しを経験した者として、受洗して義認された者として、霊において動かされている者として、同じ愛の内で兄弟を愛すべきであるし、許すべきであるし、自らが義に対して

義務づけられていることを知るべきだし、霊の動き自身の意味において活動すべきである<sup>4)</sup>。ここで「～として」ということは直説法に、また「～すべき」ということは命令法にあたるのである。パウロの書翰においては訓戒的証言は大部分直接に教義的部分からでている<sup>5)</sup>。倫理は洗礼と結合されている。前者つまり命令法は後者つまり直説法の出来事に結びついているのである。しかしたとえ受洗してもその後も罪過の体験が消えはしない。むしろその後には真のそういう体験は生じうると言える。双方の関係という問題が生じてくるが、カトリック教会では公的な懺悔によって解決しようとする。こういう受洗後の罪過の体験は Röm 7 が示す如くパウロにもあった。人が霊のからだを受けぬ限り解消しえぬことである。このような問題は公的な何らかの仕方で解消しようとするよりも、自我の否定という実存的な人のあり方という方向へ向けて解決してゆくべき問題であろう。そうすることによって更に倫理へと目と心は深まってゆくであろう。

パウロは使徒として救いの出来事の直説法の側に立っている。そしてそこからキリスト者に対して主に対して従順であり、またならうように勧告する。「キリストが、わたしのうちに生きておられるのである」(Gal 2 : 20) という主キリストとの一体というところからこういう要求をパウロはうちだしている。例えば Röm 12 によると「神のあわれみによって」(V. 1), 「心を新たにすることによって」(V. 2) 等は直説法を意味している。また「聖なる供え物としてささげなさい」(V. 1), 「この世と妥協してはならない」(V. 2), 「造りかえられ」(V. 2) 等は命令法を意味している。V. 1, V. 2 は各々からだと心についてこのように両法を記述しているのである。しかし、パウロの考えは神秘主義的ではない<sup>6)</sup>。ところで直説法即ち義認も命令法即ち聖化も共にキリストと聖霊によるところの出来事であり、根本的には同一の根源から由来しており、かくて両者は元来分離できぬものである。義認、聖化というのは、神と人との関係という次元で見ており、直説法、命令法というのは、より人間自身の在り方に沿って見ているのである。罪の赦しと新たな行為、神の目から見ての人の聖化とは結合している。目的論的には聖化が義認より上位にあるとされる<sup>7)</sup>。しかしそのような事柄の全体の構造上から言えば義認が聖化に対して優先性をもっているのである<sup>8)</sup>。このことは直説法に基づいて命令法が存していることと呼応したことであろう。目的論的に言えば聖化が上位という点について、テサロニケ前書の倫理全体は聖化 (*ἀγιασμός*) という概念の下にある<sup>9)</sup>。パウロ書翰、特に少くともテサロニケ前書では自己の存命中にさえ再臨もありうると信じていたことにも対応していることと思うが、信者は霊を受け、そして来たるべき世、終末においては 5 : 23 にある如く責められるところのない者にされるという見通しの下にあるのである。この点についてはガラテヤ書でも同様である<sup>10)</sup>。そしてキリスト者の生において神の意志、即ちキリスト者の聖化(1 Thess 4 : 3) が生じているので、キリスト者は生を肯定する<sup>11)</sup>。しかしこのような神の意志、キリスト者の聖化が生じるには最低限の条件として人の側での自我の否定が不可欠である。さもないと神の意志が人の心の内に入りえぬからである。自己に自己が関わるという関係

が一時的に廃棄されぬ限り、自己を自己で処置するという体制が続いており、これではたとえ人が自己に神が働きかけると考えた場合でも基本的体制に何ら変化は生じてはいない。自己を神に明け渡してはいない。聖化は個々の契機の事柄ではなくて、人間の生の活動の全体の事柄だとされる<sup>12)</sup>。その通りである。だからこそ聖化には自我の否定が不可欠である。これこそ人の生の活動の全体を規定している自我というものの廃棄を意味しているからである。このことはまた見方をかえると、倫理が終末論的に見られていることである。具体的には例えばテサロニケ前書とマルコ伝とに見られる<sup>13)</sup>。しかし終末における永生というものに執着しての倫理であってはならない。特に Mk 10:17での永生への期待というものはやはりそういうものへの執着を暗示しているように思われる。一方イエス・キリストご自身が十字架の死に至るまで従順であったという事実は何ものへの執着もないことが前提であると考えられる。神への信仰以外の何ものもない。この信仰というものは固よりもはや執着とは言えないものである。このような点ではキリストを通して神を信じているパウロとイエス・キリストとの間には共通性がある。執着は一切ないということ。従ってイエス・キリストご自身やパウロの信仰と Mk 10:17での「ひとりの人」との間にはその信仰において大きな落差があると思われる。しかも興味深いことには、ここでの「ひとりの人」の如くに永遠の生命に執着する人はこの世のもの、「持っているもの」(V. 21)にも執着していることである。世のものに執着がなくなると永遠の生命にも執着しなくなるのである。要するにいかなるものにも“自己の”という色彩をつけることをやめてしまうのである。イエス・キリストご自身についてみても、まず自己の生命を手放したのであった。このことが先である。その後で神はよみがえらせたのであった。

## (二)

キリストへの随従にあたっては、いわばキリストの律法が人の心の中へと書きこまれることが必要である。そのことが可能であるためには、心が人の自我の支配から解放されていることが必要である。それには自我の否定が不可欠である。自我が存している限り、それは心を手放して他のものに、例えば神に渡すことは生じえない。そして自我が心を手放すこと、心がこの世のことから離れること、イエスが自己に現われること、これらは不可分一体のことであろう。イエスが現われることなくして心の根がこの世のことから抜け切れることはないであろう。逆も真である。

神が人を赦す如くに人が他の人の罪を赦すことと同時に成立している終末への信仰において人は自己を神に任せてしまっていると言えよう。しかし神とはいっても神というものは人には直接的には知らされていない。神が下るシナイ山に近づくことさえ禁ぜられている(Exod 19:12)。そこでいまだ知らされていない神に対して自己をうちまかせてしまうことは無に対して自己をうちまかせてしまうことと同じとも言えよう。キリストという存在をもこの世の中へ受肉させたとの神的、超越的存在に対して自己をうちまかせるこ

とはこのような意味をも有している。そこで自己はそういう無と一体となっているとも言える。自己は無化されているのである。有としての自己が依然として存在しているのは、そういう自己を人から見れば無である神に対してうちまかせることはできない。有たる自己がそういう自己を神にまかせているのではない。自己自身がすでに無になっている。無たる自己がいわば無たる神に対して自己をまかせてしまっているのである。無と無とであるので、ここではもはやまかすもまかされるもない。まかされるものもなければ、まかす対象になる如きものもない。新しくよみがえった者としては一般のキリスト者はキリストと同じではないとしても無になっているという点では同じであると思われる。ただ神はキリストの啓示を人に対して与える存在なので単に無というにはつきぬことは言うまでもないことである。人格的存在イコール無とも言うべき存在であろう。そしてそういう存在に対して無という点で人が同化されてしまうことによって人としての存在と神的、超越的存在とは相違がなくなってくる。人が神の方に対して同化されることによって人にとって神というものは単に他者的存在ではなくなってくる。キリストという存在を通して人を無化して無たる神に同化させてしまい更にそういう人を霊的存在へと変えることによってこの世におけるキリストのいわば代理人とするのである。明確にどのような者であるかを知らされてはいない相手に対して自己をまかせることは自己が無になっていなくてはできぬことである。自己をまかすことは自己と同じものに対して以外にはできない。神は人にとっては知られていないので無である。かくされたる神というものは人にとっては無に等しいのである。そこで人が無にならぬ限り無たる神に対して自己をまかせることはできない。キリストを通してこのようなことが可能になるので、まさしくキリストは人と神との仲保者ということになる。こういう意味ではキリストが卓越した存在であり、かくてキリストの前であっては人も神も存在しなくなっているとも言えようかと思う。

このように考えてみると、洗礼をキリストの死に与ることであると考えた (Röm 6) のは、パウロ自身がその生においてイエス・キリストの死と同じ地平に立っていたからである。さもなくばそのように考えることはできなかつたことであろう。そうあって初めてキリストと共に生きるであろうという未来における生への希望を表明しえたのであろう。そしてそういうことを前提して初めてキリストにならう者、私にならう者になりなさい (Röm 15: 5, 1 Kor 11: 1) と人々に向って言いたのであろう。なぜなら自分が現実にキリストにならう者になっているからである。従ってこういう意味ではキリスト信仰の倫理は未来においてキリストと共に生きるであろうという希望からの倫理という性格をも有していると言える。このような希望をもつこと自体自我が否定されてキリストを受容していなくては不可能なことである。

さて、特定のもののみ自己のものと考えることによって人は自ら自分の世界を狭くしているのである。そこで自分で自ら造ったこのような限界をすて去ってしまうと無限に自分の世界を拡大しうることになる。そしてこのことと同時に自分という特定の存在もまた消

えてしまう。馳求の心もなくなっているし、それと同時に先述の如き限界造りも消滅してしまう。自分という特定の存在がなくなっているので死ぬこともなくなる。存在しなくなっているものが死ぬことはないからである。死んでも死なないのである。すでに死んでいるので死なない。復活すると言うけれども、すでに今死んでいるので復活するのである。死んでも復活するほど我が強いのではない。復活すると言えるほど今すでに死んでいるのである。それほどに我が否定されているのである。今すこしでも我が残っているとまだ死んでいないのだから、復活することなどありえないことである。その上人は復活“する”のではなくて、“させられる”のである。このように自分としての存在が消えたことは即ち神から受けた生命を再び神にお返ししたことを意味している。神のものを神に返したのである。からだはなおこの世界の中に生きているのだが、心はすでに今神の許に帰っているのである。いるべき所にいるのである。心とからだとがこのようにいわば離れ離れにも生きていればこそパウロも言う如く「からだははなれていても霊では一緒にいてすでにさばいてしまっている」(1 Kor 5 : 3)とも言えるのである。このように心とからだとはなれて生きていることによって、これら双方の間に世界の全てのものをのみこんでしまい、無化しているとも言いうるであろう。心がからだをはなれていればこそ心は自由に宇宙のはてからはてまでをわが家の如くにかけてめぐることのできるのであると思う。心がからだからはなれていることが霊における自由ということの背景にある。心がからだをはなれることは、同時に心が可視的世界の全体からはなれたことを意味する。もはや可視的世界の中のいかなるものによっても制約されたりはしなくなっているのである。可視界から自由な心のこういう在り方はいわば裸のまゝの心とも言いうるであろう。今まで心が着ていたところのからだをはなれてそれを失ってしまっているのにまだ新しいからだを受けてはいないのだから裸と言ってよいであろう。心の自由を失う如きからだを再び受けるよりは何も受けない方がよいであろう。受ける以上は心の自由が確保される如きからだ、つまり霊のからだ以外にないであろう。以上のような心の自由があって初めて「見よ、すべてが新しくなったのである」(2 Kor 5 : 17) と言えるであろう。

ところで、今自分が新聞を読んでいるとしよう。この自分は一体どういう性格のものなのであろうか。古い以前の自分か、或は一度自由になった自己が再びこの古いからだへいわば戻ってきて読んでいるのであろうか。後者であると思う。古い自己はすでに死んでいるので前者ということとはありえない。全てが新しくなったのであるから。新しい自由な自己は新しくかつ自由なればこそ古いからだの中にも再び入ってきて活動することもできるのである。さもなくば自由とは言えない。古い自己、殻の中へ入るのを避けていないと自由でないのであれば、それはまだ本当にそういうものから自由になっているとは言えない。パウロは、「御霊はすべてのものをきわめ、神の深みまでもきわめるのだからである」(1 Kor 2 : 10) と言っている。こういう見定めさえできるのは真に自由であり、一切の束縛から解放されていればこそであろう。心がからだからはなれていればこそ、現在のこの肉

のからだが減びることになっても心は決してそのことを余りにも気かけすぎたりはしない。根本的には自由を保持したまゝである。心はいわばからだなしで存在しうるようにすでにになっているのである。このからだは心にとってすでに自分のものではなくなっているのである。自然の中に存在している他の一般のものと同じものでしかないものになっているのである。心がからだから自由なればこそ心はキリストの霊と一つなる関係になりうるのである。そしてある時は心はキリストと同じ場に、またある時は人の中に再び入ってきて人の場と同じところに立つこともできるのである。

### (三)

さて、A. アウアーの理解によると、パウロは Röm 14:23 において他のところでは“信仰”のために使っている *πίστις* という語を“確信”のために使っているが、「すべて信仰によらないことは、罪である」(Röm 14:23)という言葉は宗教的基本的態度として信仰(*πίστις*)というものが宗教的・倫理的判断との双方をその内に止場すべきであることを表わしているのである<sup>14)</sup>。ところで、邦訳(日本聖書協会)では“信仰”とされているが、V. 23の前段の“疑いながら”と対比して考えてみると、“信仰”というより“確信”という方が内実的にはふさわしいとも考えられるのである。しかし V. 23には“信仰によらないから”とかかかれている。つまり“疑いながら”ということとこのこととが内実的に関連しているのである。不信仰ということと疑いということとが内容的にいえば同一の根拠を有しているのである。後者つまり何かある行為をすることについて疑いをもっている、即ちそれが正しい行いか否かはっきりしてないことと信仰が欠けていることとが関連している。信仰が欠けていると何かにつけてどちらの方へ決断するのが正しいのかについてははっきりとすることができないこと示している。信仰、即ちその一側面として自己の一切を手放すことができていないと、そのすて切れていない自己にとってどちらが好都合かと常に迷ってしまうのである。このような迷い、疑いこそ神への不信仰から由来しているのである。かくて一般的に言って倫理的に正しい行いがなされうるには、神に対して自己を明け渡していることが不可欠のことである。そしてこのような信仰に基づいて、パウロ自身「いつまでも存続するものは、信仰と希望と愛と、この三つである。このうちで最も大いなるものは、愛である」(1 Kor 13:13)と言っている如く、倫理においてはこれら三者、特に愛がその基準となってゆくのである。このような信仰に基づいての愛のみが本来よいものと言われるのである。人自身から発するものであってはそれは真によいものとは言われない。なぜなら人は自身のために他を愛するということもありうるからである。この場合、根は自己にあるのであって真の愛とは言われないのである。「なぜ私をよき者と言うのか。神ひとりのほかによき者はいない」(Lk 18:19)とイエスでさえも言っているのである。そこで神による活動、具体的にはイエス・キリストにおける人への啓示との関連によって人において生起させられる行いのみが本来よきものと言われるのである。

さて、「心を新たにする」(Röm 12: 2)については、一般的には神的な霊の到来によって知性(心)がその無能力から解放されたことが理解されるべきだと考えられる<sup>15)</sup>が、無能力とはどのような無能力なのであろうか。これは V. 2 にもあるように何が神の御旨かをわきまえることができないことであろう。このことを知りえぬ理由は、人が何かを判断する時にいつも何かの人間的、人間主義的前提や根拠によってそうしているからである。無私の愛の主体に人がなりうるにはこういうものが廃棄されねばならない。例えば自分自身にとって一番大切なものを他のもの、こと、ひとのために犠牲にすることができることは何らかの根拠があってできていることではない。根拠があってしているのであれば、その根拠が当の一番大切なもの以上に大切なものであることになってしまうであろう。そこで当の一番大切なものは実は一番大切なものではないことになるのである。従っていかなる根拠もなしにそういうことができているのでなくてはいけない。そしてこれこそ霊というものの働きと考えるとよいのである。無から創造するという神による創造とは実存的にはこのようなことであろう。無から創造するという以上、何らかの根拠や理由があってはいけない。何も根拠はない。そうであればこそそこからの行為は“私”が全く入っていないものになりうるのである。この世に現在すでにあるところの何かのためということでは固よりない。しかしまた将来自分が天国に生まれるためということでもない。現生にも来生にもそういう行為は何らかの根拠をも有してはいないのである。そして霊によって歩むこと (*περιπατεῖν κατὰ πνεῦμα*) とはいうまでもなく愛の実行である。このことによってキリストの律法は成就されるのである。このような人の行為はキリストにおける神の愛によって動機づけられているのである。このような実践に関してであるが、パウロは倫理的な要求において言葉の厳密な意味では要求をたててはいないと考えられている<sup>16)</sup>。つまり倫理的な要求においては律法的なことは言っていないとの意である。むしろ主から賜った霊を愛の具体的行為において働かせるようにとよびかけていることが Röm 12: 1 ff から分ると考えられる<sup>17)</sup>。このような態度は大切であると思われる。前以って律法的に是々すべしと決めておくことはそれ以外の場合を除外することを意味する。ところが、例えば隣人というものは具体的場において出会われるものであって、前以って規定しておくことはできない。自己の全存在を全的に愛の主体にしてゆくことは前以って規定しておくという態度とは矛盾するのである。前以ってという態度は部分的態度である。

ところで、倫理的な要求の内容そのものについては例えば 1 Thess 5: 12~24 はごく一般的、人間的な内容をもっている<sup>18)</sup>。つまりキリスト者とキリストとの関係において支配的な愛ということが人間相互の関係にも反映すべきよう考えているのである。即ち信仰そのものについては超自然的要因が深く関係しているのであるが、その倫理という点では真の人間性が重んじられているとも言えよう。信仰の内容としては秘儀 (Mysterien) 的なところがあることは避けられないが、人間相互の行為に関する内容はやはり理性的に洞察可能でなくてはならないであろう。倫理の内容そのものが神秘的ということはないことである。こ

のような点に関して大切なことは、パウロは信仰、霊の立場に立って判断するので周辺の倫理的考えを全く無批判的に受け入れているのではないということである。二様の態度をとっており、意識的に受け入れる時（Phil 4：8，Röm 12：2）と同時に批判的（Röm 12：2，1 Thess 5：21）でもあったのである<sup>19）</sup>。神の御心に合致すると思われるものを受け入れていったのであった。しかし霊にあってのキリスト者の行為は単に人間性尊重ということにつきるものではない。キリスト者の実行する愛は信仰に基づく霊というものが前提になっている。そういう意味では、その性質においてはたとえ人間性と共通的としても、その量的規定においては単なる人間性を越えた如き要素も生じざるをえないのではないかと思われる。或は量的拡大によって性質そのものが変わっていると考えるべきであろうかと思う。内容的にもかくて規範として新しいものが入って来ていると考えるべきではないかと思われる。かくて倫理的内容については非キリスト者にも近づきうるとも考えうる<sup>20）</sup>が、単純にそのようには言いえないであろう。第三者から見て為している行いについては同じ内容のことができているとも見えることであろう。では全くの合同か。徹底性でも同じなのであろうか。だがキリストという人格—超人格的存在と一体であることは他にはないことである。即ち人は人格的存在なのであ対する者もそういう存在にして初めて人の一切をいわば吸収しつくすことができると思われる。非人格的であっては、人の有している人格的部分を吸収しえぬまゝ残すことになってしまうであろう。そこで人の一切が他者なる存在によって奪いつくされることが生じえないのではないかと思われる。その結果自由とか喜びとかが充満なものにならないのではないかと思われる。しかしこれは各人の人格がいかに、どの程度人格的要因によって規定せられているかによって異なることである。このような点もキリスト者の行いが一般的人間性尊重の枠を越えているか否かという問題と関係していると思われる。

最後に、愛ということに対立する悪、罪について。悪は神の前に立てられて罪として認識される瞬間にすでに質的にかえられているのである<sup>21）</sup>。このことは大切であると思う。神との関係が回復されてその内へと悪がとりこまれてしまうと、悪はその質をかえられてしまう。罪として認識されることによってもはやただ単に悪であることを超えてしまうのである。更に神との関係さえ自我の否定によって回復させられるなら、たとえ倫理的には不完全であっても一人はそうである他ないが—それは赦しの対象になりうるのである。人は死ぬまで完全にはなりえぬのである。罪とはいつも神との契約の破棄であり、それと共に交わりと自己とを滅ぼす行為である<sup>22）</sup>。罪は神と人との関係を断絶させるのである。つまり神と人との間の愛の関係の破棄である。従って悪はただ単に人と人との間の事柄ではすまないのである。人が自我に固執することによって悪、罪に陥り、神との関係を失うことになる。そこで逆に自我がすてられる時に罪は根源的には廃絶させられているのである。Gen 3：23f，3：19によれば、楽園からの追放が神との正しい交わりの断絶であることが示されている。人に死が入ってきたことはこのことの反映である。神との正しい関係の喪



失は人にとっては滅びを意味している。また神との契約の破棄でもある。

では赦される罪とはどのような性格のものであろうか。それはそれによって神との関係が完全に否定されるのではないが、人が例えばその肉体性のゆえに犯す如き罪である<sup>23)</sup>。罪に関しての肉体性ということは大切である。パウロも Röm 7 : 7 ff.において「わたしの肢体には別の律法があって」(V. 23)と嘆いている。このように自我が否定されキリストを受け入れていても、霊のからだはまだ与えられていない段階では肉体から来る罪は避けがたいのである。しかしこういう罪は Röm 7 : 24f.にも示されている如く決して神との関係を破棄する結果にはならず、むしろ神との関係を強化する役目を果しているのである。心はいつも神、イエス・キリストの方へ向いているのである。肉体的弱さによってそのことが一時的にくもらされることはあっても、決して失なわれることはありえぬのである。このようにキリスト者の内面においては決して罪と恵みという二つの相反する力が対等につり合って戦いを演じているのではないのである。一旦自我が否定されて一回的にキリストを信じた後では事あるごとに深くキリストを信じてゆく。それにつれて罪の力はキリスト者に対して力を失ってゆく。そこで「人が後ろから規定されている罪は大いに力強い。人がそれによって前方へと規定されている恵みはいわんや大いに力強い<sup>24)</sup>」と考えるのはそれ自体としてはよいとしても、その内実はこのようであることを忘れてはいけぬのである。

## 注

- 1) H.-G. Fritzsche : Lehrbuch der Dogmatik 1988 S. 129
- 2) ibid. S. 128
- 3) K. Barth : Kirchliche Dogmatik IV/2 1970 S. 659
- 4) F. Böckle : Fundamentalmoral 1985 S. 209
- 5) A. Auer : Autonome Moral und christlicher Glaube 1989 S. 115  
 例えば Röm 6 によれば、新しい変化は洗礼によって罪の力から自由になっているから可能であり、倫理はかくてまず洗礼によって可能とせられており、同時に拘束的に課されている。倫理を洗礼や将来のよみがえりまでの救いの出来事へと結びつけている。
- 6) H. D. Betz : Nachfolge und Nachahmung Jesu Christi im Neuen Testament 1967 S. 172  
 パウロの考えは構造上はグノーシス的ではなくて、密儀的 (mysterienhaft) に性格づけられている。*ὅμοιος* の教義は完全に欠けている。*ἐν Χριστῷ, σὺν Χριστῷ, Χριστὸς ἐν ἡμῖν, ἐνδύεσθαι Χριστὸν* は全てキリストと信者との距離を解釈しているものである。従ってキリスト者の本質がキリストと同じ (*ὅμοιος*) という考えはないのである。
- 7) K. Barth : ibid. S. 575
- 8) ibid. S. 574
- 9) H. D. Betz : Das Problem der Grundlagen der paulinischen Ethik (ZThK Jg85 1988 S. 205)
- 10) ibid. S. 206
- 11) K. Barth : ibid S. 681
- 12) ibid. S. 641
- 13) A. Auer : ibid. S.116  
 1 Thess 3 : 13と 4 : 13ff とでは倫理が終末論的枠から見られている。これらの箇所は Röm 6 での

証言の具体例とせられている。

R. Dillmann : Das Eigentliche der Ethik Jesu 1984 S. 55

Mk 10 : 17について, *αἰώνιος* は終末論的期待の対象であるところのものにとっての用語として使用されているのだから, 永遠の生命というのは終末論的方向づけを強調しているのである。

14) A.Auer : *ibid.* S. 114

15) 注9) と同論文 S. 214

16) U. Duchrow : *Christenheit und Weltverantwortung* 1983 S. 125

17) *ibid.* S. 125

18) A.Auer : *ibid.* S. 117

パウロはキリスト信仰固有の倫理を企画しているのではなくて, 人間によって自覚された倫理的意識によってすでに認められている要求を信仰のケリュグマの基本的証言によって新たにかつ深く根拠づけようとしている。

19) F. Böckle : *ibid.* S. 229

20) R. Dillmann : *ibid.* S. 18

21) F. Böckle : *ibid.* S. 129

22) *ibid.* S. 127

23) *ibid.* S.146

神との親交関係が取り消されていないが, 人間が分裂した心で神のよびかけを聞き, 行おうとしているところの態度や行為として現われる。根源は人の肉体性と歴史性のうちにある。

24) K. Barth : *ibid.* S. 647

## Der Indikativ und der Imperativ in der Christlichen Ethik II

Kaoru NAGITA

*Faculty of Liberal arts and science,*

*Okayama University of Science,*

*1-1 Ridai-cho, Okayama 700, Japan*

(Received September 30, 1991)

Das Problem vom Indikativ und dem Imperativ ist das von der Rechtfertigung und der Heiligung. Das erstere betrachtet das Problem als die Seinsweise des Menschen selbst, das letztere als die Beziehung zwischen Gott und dem Menschen. Die Heiligung hat teleologisch den Vorrang vor der Rechtfertigung. Damit der Mensch Christo gehorche, ist es notwendig, daß das Gesetz Christi ins Herz des Menschen geschrieben sei. Das Herz des Menschen muß von der Herrschaft des Ichs frei werden. Aber der Mensch kann ethisch vollkommen nicht werden, obwohl sein Ich verneint worden ist. Er hat immer noch Schwächen, die aus der Sinnlichkeit stammen.